

# 後悔・落胆・納得・満足の感情と原因帰属の関連について

——意思決定研究における問題として——

崎 長 幸 恵

## 序 論

### 1. 意思決定における感情の問題

複数の選択肢 (alternative) の中からひとつあるいはいくつかの選択肢を選ぶことを意思決定 (decision making) という (竹村, 1996 a)。決定を行うと何らかの結果が生じ、その結果に伴って様々な感情が生じる。得られた結果がよければ満足し、結果がよくないものであれば後悔したりがっかりと落胆したりする。たとえ結果としては悪くなくても、思っていたよりも悪い結果であれば満足できないこともある。考えを重ねて決定したが良い結果が得られなかったのであれば、決して満足のいく結果でなくても、納得することができることもある。

決定に伴う感情は、選んだ選択肢の結果の良し悪しだけで得られるものではなく、さらに選ばなかった選択肢を考えることによっても生じる。例えばあまり良い結果が得られなくても、選ばなかった選択肢の方がもっと悪い結果であると分かれば後悔や落胆の感情は多少ましになり、少しの満足は得られるだろう。逆にさほど結果が悪くなくても、選ばなかった選択肢の方がもっと良い結果であったことが決定後に分かれば「もう一方を選んでおけばよかった」と後悔し、納得できないと感じるだろう。

私たちが実際に行う意思決定には、どの選択肢も選び難いがどれかを選ばざるを得ないという決定を迫られることがある。例えば大学進学を考えていたが受験で第一志望に失敗し、かろうじて合格した2校にはどちらも行きたくない場合は、どちらの大学を選んでも満足を得ることはない。また医療場面で治療法の選択においてどちらの治療法でもリスクが高いことがあるだろう。生存年数は長い手術後には苦しい生活を余儀なくされる治療法か、健康に生きられるが生存年数は短くなる治療法のどちらかを選ぶという場合には、

どちらかの治療法を選択すれば満足が得られるという訳ではない。

このようなどちらかの選択肢を選ばざるを得ないような場合は、満足できる決定よりも、後で後悔しない納得できる決定を考えて選択しなければならないのではないだろうか。後悔のない、納得できる意思決定とはどのような決定なのだろうか。

### 2. 従来の意思決定研究と感情に関する問題

これまで意思決定研究では、より良い結果を得るためにどのような決定を行えばよいかということに基づいて研究が行われてきた。意思決定の理論としては大きく二つの理論がある。第一に合理的な決定のために人々がすべき選択を示す「規範理論 (normative theory)」がある。この「合理的」という意味自体にさまざまな議論がなされているが、それは後に述べることとする。規範理論では、金銭的な価値などの利益 (効用) を最も得られるような意思決定、つまり効用を最大化する決定について考えられてきた。しかし規範理論においても、実際の意思決定は必ずしもこれらの公理に従った行動をしないことが議論された。そこで前述の「合理性」の意味について議論が始まり、サイモン (Simon, 1957) は規範理論が前提としている合理性に疑問を持ち、人間の「限定合理性 (bounded rationality)」を主張した (広田, 2002)。実際の決定では効用を計算したり状況を把握したりするために知識を収集する時間や、決定を行う人の認知的な能力は限られている。このことからサイモンは、人は効用の最大化ではなく、限られた能力や時間の中で満足できる基準を満たす選択を行っているという満足化 (satisfying) の基準を考えた。これらのことを踏まえて決定における感情を考えると、サイモン以前は人の決定に際して生じる感情については全く取り上げられてこなかったが、サイモンによって満足化という一種の感情が意思決定に影響すると考えられることとなった。

第二に、実際の人が行う意思決定行動の記述をめざした「記述的アプローチ (descriptive approach)」がある。記述的アプローチでは、人の選択行動や決定が規範理論から逸脱することに着目し、期待値からの逸脱が起こる条件を明らかにしてきた。規範理論が正解(規範解)を得るための手続き(アルゴリズム)を提供しているとすれば、記述理論は限定的な能力で短時間に決定を行うために、情報の中のある属性に着目するような便宜的な方法であるヒューリスティックス(heuristics)を利用していると考えられる。ヒューリスティックスを使うことによって、短時間で正解に似た結果を得られることもあるが、規範解から大きく逸脱することがある。記述理論では規範解からの逸脱が起こるような課題をいくつもあげている。それらの課題から、情報の検索のしやすさや想像しやすさ、目立った情報によって人は誤った決定を行いやすいことを示している。記述理論における決定と感情の問題を考えると、実際の人々の選択行動や決定を記述しているものの、そこに人の感情が影響することを考えているとは言えない。また、人の陥りがちな誤りを明らかにすることで正解(規範解)への道筋を提供していると考えられる。そのため規範理論と同じく記述理論もどちらもが人々がすべき行動は効用や価値の大きいものが良いと考えているとも言えるだろう。

このように従来の意思決定研究では、意思決定に伴う感情を中心に扱ってこなかった。しかしながら実際の意思決定では、決定を行う際や結果から様々な感情を感じているはずである。また満足や合理的という基準だけでは説明できないこともあるはずである。例えば、客観的に見ると非合理的な満足できなさそうな決定でも、決定を行う本人にとっては合理的な決定で、満足はできなくとも納得した結果を得られる場合もあるのではないだろうか。

### 3. 意思決定に伴う感情を扱った研究

これまで扱われて来なかった意思決定に伴う感情を考慮し、現実の人間が自分の関心に従ってよりよい選択をするためにはどうしたらよいかを考えたのが Bell, Raifa, & Tversky (1988) の主張した処方理論(Prescriptive theory)である。処方理論では次のような方法を重視した。まず意思決定者に対して人の実際の生活における行動を考えたときに規範理論には疑問が残ることを伝え、記述理論で言われるようなヒューリスティックスによる認知的な決定におけるバイアスの例

を提供する。つまり規範理論や記述理論による決定だけではなく、決定者自身が意思決定を行うという方法を重視した。処方理論には実際に有効とされる特定のモデルはないが、人が決定に際して感じる関心や不安、疑問などを無視することなく、また決定が規範解によって影響されることなく行った決定が最もよい決定と考えている。この点で、実際の意思決定を考えると、規範解にとらわれることのない処方理論の考え方は、決定者自身が納得できる決定のために用いることのできる考え方ではないだろうか。

意思決定に感情が伴うことを考慮した研究に、Bell (1982) や Loomes & Sugden (1982) らの研究がある。彼らの後悔や落胆に関する理論では、人は得られた結果と得られなかったかもしれない結果を考慮して決定を行うとしており、また起こりうる結果に伴う感情を予測して、その予測した感情を考慮に入れて決定を行うとしている。また Kahneman & Tversky (1982) は、ヒューリスティックスなどの認知的なバイアスが考えられる状況における意思決定と決定後の後悔の予測に関する研究を行った。その結果、結果がよかった場合と悪かった場合とでは結果を予測したときに生じる感情の大きさが違いすぎるため、意思決定課題において決定後の感情という未来に関する説明はできないとした。Zeelenberg, Beattie, van der Pligt, & de Vries (1996) は、選択行動に影響を与える要因として後悔の感情を用いた。その結果、くじを選択する意思決定場面において人はリスクを最小化するよりも、むしろ後悔を最小化する選択を行う傾向があることが分かった。この研究では金銭的な損失を伴うくじの選択に限られているが、その他の意思決定場面においても後悔の程度が小さい選択肢を選ぶ可能性を示唆するものと考えられる。上市・楠見(2000)では、認知要因やパーソナリティ要因がリスク行動のプロセスに及ぼす効果についての研究を行った。上市・楠見(2000)では決定後の後悔の程度の評価を測定して、認知要因として後悔を扱った。その結果、決定結果として生じる後悔の認知がリスク行動に影響を及ぼすことを明らかにした。

Zeelenberg ら(1996)や上市・楠見(2000a)では意思決定を行う際に後悔や落胆の感情が影響することが考えられているものの、意思決定における後悔がどのような感情として人が経験しているかを十分に扱った研究とは言えない。その中で Zeelenberg, van Dijk, van der Pligt, Manstead, van Empelen, & Reinderman (1998a) は、調査参加者が実際に後悔または落胆を

感じた出来事を詳細に記述してもらうという方法を取り、落胆の感情と比較することで後悔の感情を明らかにした。

これまでの意思決定研究では、実験者が設定した意思決定場面を状況に用いて、その中で人がどのような行動を取るかを明らかにしていた。このような実験者が設定した意思決定場面を用いることは、実験場面が日常の場面に類似した場面にならないという問題が残る。たとえば上市・楠見（2000 b）ではリスクをとまなつたいくつかの決定状況を用いているが、そこでの後悔という感情は状況が異なっても変わらないと考えている。しかしながら実際に後悔をした時を考えると、さまざまな原因によって後悔は生じるし、「～すればよかった」とか「～だったらよかった」とか後悔にも違いがあるはずである。さまざまな後悔が生じる状況において実際に人が感じる後悔が明らかでないという点で、実際の後悔の感情を捉えきれていないという問題が残るのである。つまり人が実際の決定の際に感じる後悔などの感情を十分に捉えられていなければ、そこで行われた決定結果が実際に決定を行った際の決定を反映しているとは言えないと考えられる。その点で Zeelenberg ら（1998 a）が行ったように、調査対象者が実際に経験した出来事を課題として用いることは、人が感じる後悔という点で妥当な方法であると考えられる。

#### 4. 意思決定における後悔と落胆の感情

上市・楠見（1998 a, 2000 a, 2000 b）や楠見（1994）では、実験者が設定した意思決定場面について、調査対象者が感じる後悔や制御可能性、不安やリスク認知について測定を行っている。その結果、リスク認知の認知要因やパーソナリティ要因が後悔の感情に影響を与えていることを確認した。また Zeelenberg, van den Bos, van Dijk, Pieters（2002）は感情を予測する方法で、以前に経験したとする出来事においてある行動をしたかどうかで後悔の感情に与える影響を検討した。その結果、行動をしなかったということが責任感を介して後悔の感情の程度に影響を及ぼすということを明らかにした。Zeelenberg, van Dijk, van der Pligt, Manstead, van Empelen, & Reinderman（1998 a）は、調査対象者が実際に後悔または落胆を感じた出来事から、落胆の感情と比較することで後悔の感情を明らかにした。また先行研究の恥と罪の関係とも対応させて後悔と落胆の感情の違いを明らかにした。さらに実際の得られた結果と得られたかもしれない結果とを比較する

「事実と異なる思考」に焦点を当て、後悔の予測に関する思考の研究を行っている。その結果、後悔の感情は行動についての統制可能である事実とは異なる思考と関係があり、落胆の感情は状況など統制不可能である事実とは異なる思考と関係があることを明らかにした。

Zeelenberg ら（1998 a）は、第二実験で実験者の設定した場面（遅刻や盗難）において感じる後悔と落胆について検討を行ったが、第一実験で明らかになった後悔や落胆の出来事から設定した場面設定ではなかった。Zeelenberg ら（1998 a）の研究では後悔や落胆がどのような出来事において生じるのかについては検討されていない。また第二実験で遅刻や盗難の場面を設定する際に、実際のそれらの場面での後悔の程度や帰属の程度が反映された設定とはなっていない。また出来事の違いが感情や思考にどのような影響を及ぼすかについても検討されていない。実際の感情を十分に明らかにしているとは言えないが、実際に経験した出来事を実験や調査に用いることによって、より現実に近い感情や事実と異なる思考を明らかにすることができると考えられる。そのため Zeelenberg ら（1998 a）が第一実験で用いた方法は、実際の感情を捉えるのに有効な方法であると言えるだろう。

#### 5. 意思決定における感情に影響する要因—原因帰属理論

意思決定研究では、選択行動と決定結果の解釈という因果関係の認知によって、決定後の予測を考慮することができるとしている（竹村, 1996 b; 細田, 1993）。因果関係の認知とは出来事や結果が生じた原因や理由について考えることであり、原因帰属（Causal Attribution）と呼ばれている。

Niedenthal, Tangney & Gavanski（1994）は恥と罪の感情において感情を左右する要因として原因帰属を用いている。Zeelenberg ら（1998 a）は後悔と落胆の感情において原因帰属を扱っているが、その理由は「付加的なもの（Zeelenberg, 1998 a）」としており、Niedenthal ら（1994）に倣って取り入れているに過ぎない。しかしながら決定結果によって生じる感情には、人が行動と結果の因果関係を考えることが影響すると考えられ、原因帰属は意思決定と感情に深くかわる要因のひとつではないかと考える。

原因帰属の理論はハイダー（Heider, 1958）の対人知覚に始まり、ハイダーは原因を「内的なもの」と「外的なもの」に二分して考えた。その後原因帰属の

理論やモデルは発展した。たとえばケリー (Kelley, 1967) は、帰属は説明されるべき事象と歴史的に最も密接に関連している原因を探ることによって可能になるとし、ジョーンズとニスベット (Jones and Nisbett, 1972) は行為者の帰属と観察者の帰属の違いは、両者が利用する情報の差異、つまりは何に注目するかの違いによるとした (細田, 1993)。

これまでの意思決定研究では、より満足や効用を得る方法が重視されてきたこともあり、あまり原因帰属について考えられることはなかった。意思決定研究において原因帰属が用いられてきたのは、主に規範理論から逸脱する理由の一つとして行為者の誤った帰属が選択行動や決定に及ぼす影響を検討するという形である。つまりギャンブルなどの場面において、誤って内的または外的に帰属がなされることが規範理論から逸脱する要因であるということを中心とした比較的シンプルな用いられ方であったと言える。

しかしながら後悔のない決定や納得できる決定を考えるのであれば、良い結果に導くためだけに原因帰属を考えるのは不十分ではないだろうか。ワイナーら (1972) は成功と失敗の帰属について、ある行動の結果が成功であった場合は自己の努力や能力に帰属されやすく、失敗であればその課題の難しさや運の悪さなど外的な帰属がされやすいということを明らかにした (細田, 1993)。つまり悪い結果は外的な帰属がなされやすいということが言え、後悔や落胆、不満足や納得がいかないといった感情とは外的な帰属が影響することも考えられる。しかし、前述の個人の認知傾向における統制 (control) の要因と併せて考えると、同じ悪い結果でも実際の状況において原因が誰の統制下にあったと考えるかによって帰属の方向は変化すると考えられる。悪い結果が生じたときその原因が自分であり、さらにその原因が統制下にあった場合にはより内的な帰属がなされるし、統制下になかったことであれば内的な帰属はなされにくいと考えることができる。

原因を考えたり推測したりすることから、意思決定研究では似たような出来事において生じる結果を予測することができるようになると考えることからしばしば用いられる。原因を推測することで、かつて悪い結果が起こった出来事と同様の事態においては同じような悪い結果を避けることができ、好ましい結果を得るための判断や選択行動がしやすくなる。この点でも意思決定研究において原因帰属は注目されていた。従来の意思決定研究では、決定後の感情の違いについて原因帰属は実際にはあまり用いられなかったが、結果が

悪かった場合の感情への影響や後悔のない決定を行うための感情の予測にも原因帰属は重要な要因と考えられる。

## 6. 満足と納得について

これまでに述べたように、従来の意思決定研究では効用や価値を最大化する決定や、満足を得る決定という観点からより良い決定の基準として被験者の満足度を用いてきた。しかしどちらか決めにくい選択肢の中から決定を行わなければならないときや、どちらにしても満足できる結果が得られないような場合には、後悔しない決定や納得できる決定が必要と考えられる。後悔のない決定や納得できる決定を考えるにあたって、納得について以下に述べていくこととする。

現在の意思決定研究では、納得できる決定についてなされた研究はなく、満足できる決定が大半を占めているといえる。広辞苑によると納得とは、「承知すること。なるほどと認めること」である。和英辞典で「納得」を引くと“satisfaction”となり満足と同じである。また“satisfy”の類義語である“convince”や“assure”では「相手に確信させる」という意味から納得として使われるようである。

「納得」と「満足」を分けて用いた意思決定研究は見られないが、どちらにしても満足できる結果が得られないような、選択せざるを得ない場合を考えると、満足や効用を用いた理論では十分に説明できないと考えられる。どちらかを選ばざるを得ない場合には、どちらの選択肢を選択しても満足度は低いと考えられる。このため決定場面によっては満足度では十分に測定できず、納得の程度で測定できる場面があると考えられる。納得がどのような時に生じるものなのか、またその他の感情との関係について、特に従来用いられてきた満足とはどのように異なるかについて検討が必要であると考えられる。

## 目 的

以上のように、従来の意思決定研究では決定課題として様々な状況を設定して決定後の感情を測定していた。しかしながら実験者が設定した決定状況の中で測定される感情は、決定状況自体が実際の状況を再現できているとは言い難く、さらにそこで測定された感情では実際の感情を反映していないという問題が残る。そのため、まず意思決定の結果に伴って生じるとされる後悔や落胆といった感情が、実際にはどのような出

来事から感じられているかを明らかにする必要がある。このことは、意思決定課題に用いられている状況の検討のために有用であろうと考える。

また、結果に対する原因の捉え方が感情を生じさせるのに重要であると考えられる。しかし従来の研究では、設定された場面で与えた結果から生じる感情を測定しており、このような方法では原因の帰属がされにくく、実際に生じるような感情が測定できるとはいえない。そのため、実際に後悔の感情が経験されたときの原因帰属が感情へ及ぼす影響を明らかにすることも必要である。

なお、これまでなされた満足できる決定に対して、納得できる決定についても検討する。従来の意思決定研究において考えられてきた満足による評価ではなく納得による評価を考え、探索的に納得の程度と満足度を測定する。

本研究では、Zeelenbergら(1998 a)が想定しているように、原因帰属(内的帰属/外的帰属)と感情(後悔/落胆)の関連について、認知を経て感情が生じる過程を検討する。

## 調査方法

以上の目的から、後悔や落胆の感情が生じた出来事を分類し、それらの感情がどのように生じるか検討する。本研究では、後悔を感じた出来事について記述する群を「後悔条件」、落胆について記述する群を「落胆条件」とする。また後悔や落胆が生じたことと記述された場面や状況、内容を分類したものを「出来事」とする。

### 1. 調査対象

調査対象者として、後悔や落胆などの経験があると思われる成人の男女を用いることとした。調査票は全部で334部配布し、249部が回収できた。そのうち193部が有効回答であった(回収率=57.8%)。属性は、甲南女子大学の大学生・大学院生(女性93名、平均年齢22.1歳)、兵庫教育大学の大学生(男性12名、女性60名、計72名。平均年齢19.2歳)、同大学大学院生(男性7名、女性13名、計20名。平均年齢33.6歳)、社会人8名(男性4名、女性4名。平均年齢41.1歳)であった。回収方法は、社会人の調査対象者には直接依頼し郵送で回収したものと、別の調査者によって調査の依頼と回収をしたものがある。大学生と大学院生には授業の時間で記述したり、持ち帰って後

日提出してもらったりした。

### 2. 調査内容

表紙には、研究の概要と研究への参加のお願いや記入された結果の保護に関する文とともに、調査対象者の年齢(記入の抵抗がある人は年代の区分に丸をつける)と性別を記入する欄、調査者の氏名や所属と連絡先をつけた。

次のページには、調査対象者が強く後悔(または落胆)を感じた出来事を記述してもらった。後悔(落胆)条件の記述欄に示した教示は以下の通りである：「あなたの人生で、強い後悔(落胆)を感じた出来事を思い出してもらいたいと思います。この出来事の大枠と詳細を以下に記入してください。もしスペースが足りなければ、このページの裏面に続けて記入してください。書かれた文章は、これを読んだ人が、あなたが経験したのと同じようにその出来事を感じられるように記述してください。」

次に、記述した出来事について調査対象者が感じた後悔・落胆・納得・満足について感じた程度を評定してもらった。納得と満足は「納得(満足)できないと感じた程度」として、全くない(1)~とても(10)の10段階で評定してもらった。また全体的にその出来事からどのような気持ちになったかについても測定した。これはとてもよい(-1)~とても悪い(10)までの11段階で評定してもらった。

次のページでは帰属(内的帰属・外的帰属)を測定した。内的帰属は、「あなた自身その出来事を引き起こした、と思う程度はどの程度ですか?」と尋ねた。また外的帰属は、「その出来事が外部からの要因で引き起こされた程度はどの程度ですか?」と尋ねた。これらの質問には、とても少しの程度(1)~とても大きな程度(10)までの10段階で評定してもらった。最後に、感想等を記入できるページを設けた。

### 3. 調査手続き

質問紙を含む調査票の小冊子を調査対象者に配布した。甲南女子大学の大学生・院生と、社会人の一部には記入例のない調査票を、残りの兵庫教育大学の大学生・院生、社会人の一部の調査対象者には記入例などをつけた調査票を配布した。配布時に、後悔について記述する後悔条件と落胆について記述する落胆群をランダムに配布し、回収後に条件別に分けた(後悔条件：99名、落胆条件：94名)。

## 結果と考察

### 1. 後悔と落胆が生じた出来事について

#### 結果

記述された出来事の種類をおこなった。出来事の種類方法は、自由記述の中の共通する単語によって分類した。

まず「友人」や「知人」などの単語や、その関係の中で他者から調査対象者になされた会話や言動に関する内容があれば『対人』とした。「受験」, 「試験」, 「不合格」, 「落ちた」などの単語があり、何らかの試験に落ちたという内容があるものを『受験』とした。また、対人関係のひとつと思われるが、「彼氏」や「彼女」, 「恋人」, 「付き合っていた」などの単語から異性間の交際が認められる内容を『恋愛』とした。「死」や「亡くなった」などの単語があるものは『死別』, 「就職」, 「将来」, 職種などに関する記述があれば『就職』, 「(高校や大学, 大学院への) 進学」や「(就職か進学か) 進路」を「迷う」などの内容であれば『進路』, 「不注意」やそれによる「事故」に関するものは『失敗』, 「(クラブなどの) 試合」や「宝くじ」などの記述があれば『勝負事』に分けた。他者は関わらずに自分のことを中心に書かれたものは『自己』とした。上記に分類されないものは『その他』とした。

後悔群と落胆群の条件ごとに、記述された出来事を分類した(表1)。記述された出来事を分類した結果、対人関係は66例(後悔群=37, 落胆群=29), 受験が35例(後悔=13, 落胆=22), 自己に関するものは18例(後悔=9, 落胆=9), 失敗は17例(後悔=14, 落胆=3例), 恋愛は16例(後悔=12, 落胆=4), 死別13例(後悔=2, 落胆=11), 以下進路9

例, 就職5例, 勝負事4例, その他10例に分類することができた。

#### 考察

結果から、後悔を感じた出来事を尋ねても落胆を感じた出来事を尋ねても、どちらにも共通する出来事があることが明らかになった。このことは、後悔の感情は生じさせても落胆の感情が生じないような出来事があるのではないことを示唆するものである。つまり一つの出来事が一つの感情を生じさせないことがあり、一つの出来事から異なる感情が生じるには出来事以外の要因によっても決まる可能性があると言える。

また後悔と落胆が生じる出来事は単一の出来事ではなく、複数の出来事があることが明らかになった。今回の調査からは、後悔と落胆の感情が生じる共通の出来事として対人や受験など9つの共通する出来事があることが分かった。

今回の調査では、死別に関する出来事が年齢の高い被調査者から記述された。これは配布した調査票と回収した調査票のバランスから、調査者によって条件ごとの配布数が異なってしまったため、年齢によって記述された出来事が異なった可能性によると考えられる。しかしながら、年齢によって経験された後悔または落胆の出来事が異なるかどうかは今後検討の余地があると考えられる。

従来の意思決定研究では、受験場面における意思決定課題などは考えられていたが、スキーや山登りなどのリスク行動や施錠をするかどうかといった場面が決定課題として用いられ、その中で後悔すると思う程度を評定していた。しかしながら、本研究で明らかになった通り実際に後悔を感じたとして思い出されるような出来事には友人・恋人などの対人関係における言動や、失敗行動に関するものなどであった。意思決定課

表1 出来事の種類

出来事	後悔				落胆				総数(%)
	件数	%	平均年齢	(SD)	件数	%	平均年齢	(SD)	
対人	37	37%	20.8	(5.5)	29	31%	27.5	(9.5)	66(34%)
受験	13	13%	23.6	(9.0)	22	23%	21.5	(3.3)	35(18%)
自己	9	9%	19.2	(0.4)	9	10%	26.1	(14.0)	18(9%)
失敗	14	14%	19.9	(1.7)	3	3%	21.0	(4.4)	17(9%)
恋愛	12	12%	20.8	(2.7)	4	4%	20.3	(1.3)	16(8%)
死別	2	2%	20.0	(2.8)	11	12%	29.9	(14.0)	13(7%)
進路	6	6%	21.2	(2.8)	3	3%	22.7	(6.4)	9(5%)
就職	4	4%	29.5	(14.0)	1	1%	—	—	5(3%)
勝負事	0	0%	—	—	4	4%	19.0	(0.8)	4(2%)
その他	2	2%	19.0	(0.0)	8	9%	24.2	(5.8)	10(5%)
計	99		21.2	(5.8)	94		24.9	(9.1)	193

題において後悔を生じさせるには、このような実際に後悔が生じる場面を用いることが必要であると考えられる。

## 2. 原因帰属から感情が生じる過程の検討

### 2-1. 仮説的因果モデル

次に後悔や落胆の感情が生じるプロセスを検討するため、モデルの構成を試みた。今回は原因帰属から後悔と納得が生じる過程を検討することを目的としたため、本研究の後悔条件のデータから原因帰属（内的帰属/外的帰属）と感情（後悔、落胆、不納得、不満足）を用いた。その理由は、先にも述べたように、後悔は落胆と比較して研究がなされており、また不納得は本研究では不満足と対として捉えているからである。これらの感情が原因帰属を経て生じる過程に関してモデルを構成することとした。

このモデルの構成に際して、まず仮説となる因果モデルを作成した。まず本研究では原因帰属が感情を生じさせる重要な認知要因として考えてきたため、原因帰属理論を提唱したワイナー（Weiner, B）の原因帰属と感情のモデルを鹿毛（1997）が図示したものを参考にした。鹿毛（1997）の「原因帰属の影響過程」のモデル（図1）は、行動の結果である成功や失敗の原因をどのように認知（帰属）するかによって感情が変わり、それによって次回の行動に影響を与えるということを図示したものである。本研究では、鹿毛（1997）のモデルの「原因帰属」→「感情」の部分を用いてモデルを構成した。鹿毛（1997）の「原因帰属の影響過程」における「原因帰属」は、本調査の観測変数である「内的帰属」と「外的帰属」それぞれが該当するものとしてそれぞれの評定値を使用した。また「感情」は本調査の観測変数である「後悔」、「落胆」、

「不納得」、「不満足」の4つが該当するものと考えそれぞれの評定値を使用した。

原因帰属（内的帰属/外的帰属）と感情（後悔、落胆、不納得、不満足）の関係について、それぞれの影響の関係について検討するため変数間の相関係数を算出した（表2）。その結果、内的帰属と外的帰属の間には負の相関が見られ、これらは共変関係にあると考えられた。また内的帰属と後悔、後悔と落胆に相関関係があった。一方、外的帰属と不納得、不納得と不満足にも相関が見られた。また後悔と不満足、落胆と不納得の間にも弱い相関が見られた。

### 2-2. モデルの構成

以上の相関関係や鹿毛（1997）の「原因帰属の影響過程」、Zeelenbergら（1998 a）における原因帰属から感情のモデルを考慮して、認知過程を経て感情が生じる因果モデルの構成を試みた。なおモデルの検証は、Amos 4.0 を使用してパス解析モデルによるパス解析をおこなった。パス解析の結果、最終的に採択した因果モデルを図2に示した。

採択されたモデルの主な適合度指標はカイ二乗値=6.945、その確率は $p=0.326$ 、 $GFI=0.978$ 、 $AGFI=0.924$ 、 $RMSEA=0.040$ であり、モデルとしての適合度は十分であると言える。

### 2-3. モデルの解釈と考察

今回採択したモデルから、「内的帰属」が「後悔」を直接的に生じさせ（パス係数 .48：以下（ ）内の値はパス係数を表す）、「後悔」を介して「落胆」が生じる（.37）と解釈できた。これは、内的帰属によって直接落胆の感情が生じると言うよりも、後悔をすることで落胆を感じるということを示唆している。そして「外的帰属」が「不納得」を直接的に生じさせると解釈できた（.39）。そして「不納得」を介して「不満足

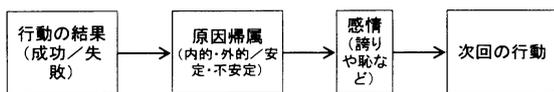


図1 原因帰属の影響過程（鹿毛，1997）

表2 後悔条件における変数間の相関

	後悔	落胆	不納得	不満足	内的	外的
後悔	—					
落胆	0.40**	—				
不納得	0.14	0.28**	—			
不満足	0.27**	0.14	0.38**	—		
内的	0.40**	-0.01	-0.16	-0.01	—	
外的	0.04	0.07	0.39**	0.03	-0.34**	—

\* : 5% \*\* : 1%

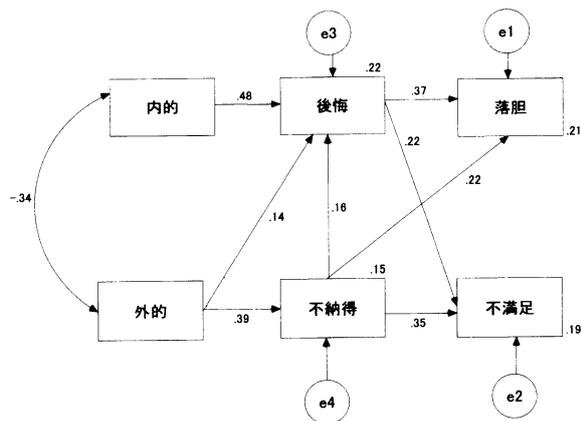


図2 原因帰属による感情に関する因果モデル（標準化係数）

足」が生じるということができた(.35)。つまりこの事は外的帰属によって不満足だと感じるのではないということがわかる。また外的帰属から不納得を介して落胆の感情が生じることや、内的帰属から後悔の感情を介して不満足と感じるということが分かった。

### 総合考察

結果から、後悔の感情が生じる出来事には複数の出来事があり、今回の調査では対人の出来事や受験に関する出来事によって後悔が経験されたことが分かった。また落胆した出来事について尋ねた条件(落胆条件)においても、後悔条件の被調査者が記述したのと同じような出来事が記述された。このため、後悔が生じる出来事では落胆の感情も生じることがあると示唆された。分類された出来事を見ると、従来の意思決定研究で用いられてきたような場面(受験場面など)も見られたが、リスク行動に関するものばかりではなかった。このことから、意思決定課題の場面設定に際して、今回得られたような対人関係における言動に関する場面や失敗する場面を用いることで、より実際に感じられるような後悔について検討できるものと考えられる。

また後悔を感じた出来事における原因帰属と感情の生起過程について検討した結果、原因帰属によって生じる感情が異なることが分かった。つまり、内的帰属がなされると後悔の感情が生じ、外的帰属がなされると納得できないという感情が生じると言える。

このことから、後悔や落胆、不納得や不満足といったネガティブな感情は、原因帰属によって異なって生じるということが示唆された。

### 結論

従来の意思決定研究において用いられている方法や感情の扱い方は、実際に感情が生じる場面や感情について十分に反映できていないという問題があった。そのため本研究では Zeelenberg ら(1998 a)らの手法に基づいて調査を行った。被調査者が実際に後悔または落胆を感じた出来事を用いて、後悔と落胆の感情が生じる出来事にはどのようなものがあるのか、原因帰属によって後悔や落胆の感情が生じる過程について検討した。

結果から、内的な帰属によって後悔の感情が生じ、外的な帰属がなされると落胆や不納得の感情が生じる

ことが分かった。内的な原因帰属は納得できないとは感じないが、外的な原因帰属が強いと納得できないと感じることも明らかになった。これらのことから、原因帰属の違いによって生じる感情が異なることが示唆された。本研究では後悔条件における感情の生起過程についてのみ検討を行ったが、出来事の違い、ネガティブな結果における原因の捉え方、生じる感情の違いを包括的に検討する必要があるだろう。

### 引用文献

- Antaki, C. & Brewin, C. 1982 *Attributions and Psychological Change*. Academic Press. 細田和雅・古市裕一(監訳) 1993 *原因帰属と行動変容 心理臨床と教育実践への応用*. ナカニシヤ出版.
- Bell, D. E. 1982 *Regret in decision making under uncertainty*. *Operation Research*, **30**(5), 961-981.
- Bell, D. E., Raiffa, H. Tversky, A. 1988 *Decision Making: Descriptive, Normative, and Prescriptive Interactions*. New York: Cambridge University Press.
- 広田すみれ 2002 認知的アプローチ: 規範・記述・処方理論. 広田すみれ・増田真也・坂上貴之(編) *心理学が描くリスクの世界—行動的意思決定入門—*. 慶應義塾大学出版会, 25-96.
- 鹿毛雅治 1997 感情が個性を生む: 動機付け. 海保博之(編) *「温かい認知」の心理学—認知と感情の融接現象の不思議*. 第7章. 金子書房, 141-159.
- Kahneman, D., & Tversky, A. 1982 *The simulation heuristics*. In D. Kahneman, P. Slovic & A. Tversky (Eds.), *Judgment under uncertainty: Heuristics and biases*. New York: Cambridge University Press. 201-208.
- Loomes, G., & Sugden, R. 1982 *Regret theory: an alternative theory of rational choice under uncertainty*. *Economic Journal*, **92**, 805-824.
- 楠見 孝 1994 不確実事象の認知と決定における個人差. *心理学評論*, **37**, 337-356.
- Niedenthal, P. M., Tangney, J. P., & Gavanski, I. 1994 "If only I weren't" versus "if only I hadn't": Distinguishing shame and guilt in counterfactual thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 585-595.
- 竹村和久 1996 a 意思決定とその支援. 市川伸一(編) *認知心理学4 思考*. 第4章. 東京大学出版会, 81-105.
- 竹村和久 1996 b 意思決定の心理—その過程の探求—. 福村出版.
- 上市秀雄・楠見 孝 1998 a パーソナリティ・認知・状況要因がリスクテイキング行動に及ぼす効果. *心理学研究*, **69**(2), 81-88.
- 上市秀雄・楠見 孝 1998 b 損失状況におけるリスク行動の個人差を規定する要因: 共分散構造分析法による検討. *日本リスク研究学会誌*, **10**(1), 65-72.
- 上市秀雄・楠見 孝 2000 a 後悔がリスク志向・回避行動における意思決定に及ぼす影響: 感情・パーソナリ

- テイ・認知要因のプロセスモデル. 認知科学, **7**, 139–151.
- 上市秀雄・楠見 孝 2000 b 後悔の時間的变化と回復方法. 日本心理学会第 64 回大会発表論文集, 811.
- Zeelenberg, M., Beattie, J., van der Pligt, J., & de Vries, N. K. 1996 Consequences of regret aversion: Effects of expected feedback on risky decision making. *Organizational Behavior & Human Decision Processes*, **65**(2), 148–158.
- Zeelenberg, M., van Dijk, W. W., van der Pligt, J., Manstead, A. S. R., van Empeln, P. & Reinderman, D. 1998 a Emotional Reactions to the Outcomes of Decisions: The Role of Counterfactual Thought in the Experience of Regret and Disappointment. *Organizational Behavior & Human Decision Processes*, **75**(2), 117–141.
- Zeelenberg, M., van den Bos, van Dijk, E., & Pijters, R 2002 The Inaction Effect in the Psychology of Regret. *Journal of Personality and Social Psychology*. **82**(3), 314–327.